

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

／開拓編／

第22回、移住者たち

坂本平九郎

平岸へ移った移住者たちの顔をみてみましょう。移住の際リーダーを務めたのは坂本平九郎、中目文平、吉川太左衛門の3人で、彼らが村のまとめ役となっていました。坂本平九郎は、真つ先に平岸への移住を提唱し、移住前年には同志7人と入植地の選定のため来道するなど移住の推進役となった人物です。水沢藩では砲術の名手として知られ、幕末には藩命により江戸に行き、江川太郎左衛門について西洋砲術を究めました。明治9年平岸で亡くなり、天神山の澄川墓地に墓石が残っています。「留守家旧臣名簿」によれば、坂本家は二番座召出となっており、留守家の中でも由緒正しい名家でした。平九郎の子、育太郎は西13番に入植した椎名弁七郎に子がいなかったため、椎名家の養子となっています。椎名家は蘭学者の高野長英の血筋にあたり、弁七郎の妻は東京市長を務めた後藤新平の姉です。弁七郎の孫養子が、昭和中期の自民党の重鎮であり、官房長官・外務大臣・副総裁などの要職を歴任した椎名悦三郎です(金脈問題で退陣した田中角栄に代わり、三木武夫を総裁に選んだ椎名裁定を下したことで知られています)。

中目文平

中目文平は、水沢藩士ではなく、仙台伊達宗家の御一家衆であり、水沢から20キロほど北に位置する江刺郡上門岡の領主中目家の三男でした(図1)。文平は宝蔵院流槍術の達人であり、目録を授かっています。武者修行のため水沢に来て同門の水沢藩士らと腕を競っていました。彼らの活躍により水沢の武術は大いに面目をあらためたといわれています。この特技を通して、水沢藩士らと親密な交流があり、このことが平岸への移住を決意させるきっかけになったようです。入植後は村の総代人を務め、用水路の整備などインフラの充実を進めています。また、大変几帳面な人で、日々の出来事を記録に残しています。この記録は、「中目文平日記」と名付けられ、平岸のみならず、北海道の開拓初期の歴史を知るうえで貴重な資料となっています。

吉川太左衛門

吉川太左衛門については、長い間詳しい来歴がわかっていませんでした。昭和50年ごろになって、ある水沢藩士(山崎家)の旧宅のふすまに、下貼りとして幕末に書かれた大量の手紙が使われていたことがわかり、水沢の郷土史家の故・小林晋氏に持ち込まれました。その中に、吉川太左衛門に関する手紙があり、それによれば、仙台藩内にある鉾山の普請工事を委託されていたことがわかりました。水沢藩では、特殊技能を持つものを家臣に引き立てており、吉川太左衛門もそういった経緯で藩士に取り込まれたと考えられています。太左衛門は鉾山工事を監督するほどですから世事に通じ、統率力があつたので移住の際にリーダーに選ばれたのでしょう。入植後も、その特殊な技能を活かして、明治20年に南区の小金湯温泉を発見し、温泉旅館「吉川旅館」を開業しました(図2)。現在、吉川旅館のあった場所には「湯元小金湯」が建っています。

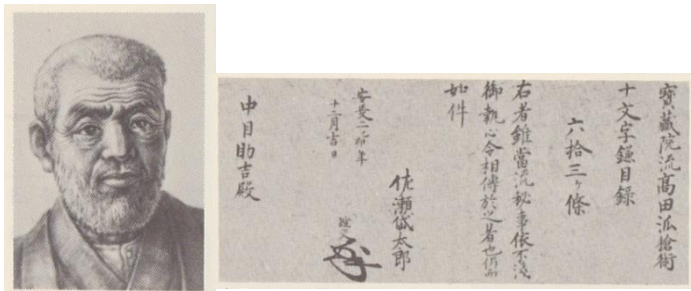


図1. 中目文平肖像と宝蔵院流槍術目録(平岸百拾年より)

吉川鉄之助

吉川太左工門の一人息子鉄之助は、明治4年13歳で両親とともに平岸に入植しました。明治9年に札幌農学校が開校すると同年10月には、開拓使学校雇として農場勤務となり、札幌農学校教頭であったクラーク博士から教えを受けます。クラーク博士の日本滞在はわずか8カ月でしたが、鉄之助は、「私の生涯で最も影響を受け、誇りに思うことは、クラーク先生に仕えたことである」と晩年まで語っていたそうです。農学校での勤務のかたわら、洋式農法の実践に果敢に取り組み、農耕馬やプラウなどの馬耕具を開拓使より払い下げてもらい、平岸での普及につとめました。このような新農法への挑戦が、やがて平岸が日本を代表するリンゴ園となる下地となります。明治20年に平岸を去り、長沼の最初の開拓者となります。クラーク博士に学んだ農業技術で新たな土地を開きたいという情熱があったのでしょう。開拓初期はバッタと霜の害に遭い、鹿肉などを売って飢えをしのいだそうですが、すぐに軌道に乗ります。明治25年に開村する際、住民たちが鉄之助の功績をたたえ「吉川村」と名付けようとしたが、固辞したそうです。結局、タンネットと呼ばれる細長い沼があったことから、長沼村になりました。明治28年には初代戸長になり、道路や橋の建設、運河の構築、小学校の設置など多数の業績を残しましたが、昭和6年73歳で亡くなります。鉄之助は、長沼町開拓の祖と仰がれ、昭和12年には長沼役場前に胸像が建てられています(図3)。鉄之助の功績が縁となり、長沼町と水沢市(現在は奥州市水沢区)は昭和48年姉妹都市となっています。

参考資料

水沢市史第3巻、水沢市史刊行会

平岸百拾年、『平岸百拾年』編集委員会

長沼町ホームページ

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】

〜平岸の知性〜

北海道大学の名誉教授を務めた故・高倉新一郎氏は郷土史「平岸百拾年」の序文で、「平岸の知性」という言葉を使っています。北海道を代表するインテリであった人物からみても、平岸には他の街とは一線を画す知的な印象があったようです。事実、開拓後すぐに洋式農法を取り入れ、リンゴ栽培に成功し、昭和期には、直木賞候補となった文学者の澤田誠一氏やオホーツク文化の研究で知られる考古学者の大場利夫氏といった人物が平岸から生まれています。「平岸の知性」の原点はどこにあるのかということが執筆当初からの疑問でしたが、この開拓編を調べて、水沢藩の知識階級であった武士たちがその土台となっていることがわかりました。水沢藩は以前書いたように偉人のまちとして知られ、江戸時代の文化水準は日本でもトップクラスだったといえます。水沢からの開拓者の最大の遺産は平岸に知性をもたらしてくれたことかもしれません。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球
学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭
に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-348

FAX: 0120-128-358

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています



図3. 吉川鉄之助胸像
(長沼町 たかす地域情報ブログより)



図2. 昭和21年ごろの小金湯温泉旅館
(定山溪鉄道資料集より)